

散逸物語『すまひ（相撲）』復原考

宮崎，裕子
九州大学：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/25274>

出版情報：文献探究. 49, pp.1-6, 2011-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

散逸物語『すまひ（相撲）』復原考

宮崎裕子

一 はじめに

散逸物語『すまひ（相撲）』の現存資料は『風葉和歌集』に収録された十首の歌のみで、修理亮・右中将・土佐守女・内記の聖という四人の登場人物が確認され、十首中六首の詠者である修理亮が主人公もしくは中心的な人物だと考えられる。本稿では、以下に掲げる『風葉和歌集』所載の和歌をもとに、『すまひ』の部分的な復原を試みる（注1）。

（A）卷第八 離別 五四一

相撲の節過ぎて、筑紫に帰り下らんとて、すけの中将のもとにまかりてよめる
相撲の修理亮

数ならぬ身こそ行くとも従はぬ心は君に立ちも離れじ

（B）卷第八 離別 五四二

返し
右中将

とどむとも心は見えぬものなればなほ面影ぞ恋しかるべき

（C）卷第八 離別 五四三

明けん年も又上るべきよしなど申して
都出でてまた来む秋の空まではおぼつかなくぞ待ち渡るべき

（D）卷第八 離別 五四四

返し
修理亮

なかなか都の月を見初めては心づくしに我ぞながめん

（E）卷第八 羈旅 五九六

筑紫へ降り下りける道にて、海のわたりを下りて、海松・貝などを手まさぐりにして、右中将の懐かしう語らひしを思ひ出でて
相撲の修理亮

あさりする荒磯よりも都にてみるかひありし君ぞ恋しき

（F）卷第八 羈旅 五九七

舟より下りたるに、波の高く打ちかくればよめる

来し方もまた行く先もはるかなる波のなかにも交じりぬるかな

（G）卷第九 哀傷 六五〇

せうとの身まかりにけるを、日ごろさだかにも聞き侍らざりけることを思ひて、雪の降る日よめる
相撲の土佐守のむすめ

人知れず消えにけんこそあはれなれ世にふる雪を見るにつけても
(H) 卷第十六 雑一 一一六四

土佐の国室生といふ所に住むころ、帰る雁を聞きて
相撲の修理のすけ

かりがねに言や告げまし君が住む都も同じ方とこそ聞け

(I) 卷第十八 雑三 一一三四四

心にもあらず土佐のむろふといふ所に住みけるころよめる

相撲の修理のすけ

世の中に生きたるかひも拾はぬに荒磯波に袖のぬるらん

(J) 卷第十八 雑三 一一三四五

荒磯を見つつ過ぐさばおのづから生けるかひにも会はざらめやは
返し 内記の聖

二 題名

『すまひ』の主要登場人物らしい修理亮は、相撲節終了後にその節会を運営する近衛府の「次将」である右中将のもとに参上して筑紫へ帰る暇乞いをし(A)、その中将から次に相撲節が開催される来秋も上京するように言われている(C/注2)ので、相撲人であったと推測できる。

相撲節の様子を詳細にきらびやかに描写する『うつほ物語』の「内侍のかみ」巻は、別名を「相撲の節会」巻とも言い、相撲節を取り仕切る右大将兼雅と左大将正頼とが、各自の所属となる相撲人の容貌などについて語り合う場面がある(注3)。

(兼雅)

(右方ノ相撲人トシテ) 参上りたる限りはことなき者どもなむ

ある。かたちもいと清げにて、ただ今の力の盛りなる男どもにて

いとよし。なほ仕うまつらむに、少し見どころある年の相撲人ど

もになむある。」(②177~178頁)

(正頼)

「左のも由ある者どもあめり。力つき、容貌などもことなきう

ちにも、今年思ふところや侍らむ、こともなく心づかひしてなむ

まうで来ためる。」(②178頁)

ここでは武芸のみならず容姿も優れていることが相撲人に求められており、『すまひ』の修理亮も「いと清げ」と評されるような容貌の持ち主で、都の貴公子右中将の目に留まったのであろうか。東国で生まれ育った武士でもある『石清水物語』の伊予守は、大番役で上京した際に関白の子息秋中納言と対面し、「美貌を誇る都の公達も及ばない」と称賛され、都に滞在している間は常に伺候するよう求められている。修理亮の詠んだDに「都の月を見初めては」とあることから、二人の出会い、もしくは二人の間柄が親密なものとなったのは相撲節を機縁としてであり、題名にも採られた「相撲」節に関連する行事は、『うつほ物語』の場合と同様に、この物語の見所の一つであったと考えられる。

三 修理亮と右中将との関係

AとEから、右中将と修理亮との間柄はかなり親密なものであったらしいことが窺える。「我が身は都を離れても、心は貴方の側に居る(A)」「私の側に留まっている貴方の心が目に見える訳ではないので、

やはり私は貴方の面影を恋い慕うだろう（B）」などと言いつけて別れを惜しみ、筑紫へ向かう道中修理亮は、「右中將の懐かしう語らひしを思ひ出」して彼のことを「恋いし」がる（E）という、こうした二人の間柄は、男色関係ではないかと指摘されている（注4）。

秋中納言と伊予守との同性愛を描く『石清水物語』には、秋中納言が「懐かしう語ら」つて伊予守を掻き口説く場面がある。

（秋中納言ハ）かしま（伊予守）をわが御かたにめしいれて、「あやしく、うちつけなるやうに思はれぬべく、はゞかりおぼゆれど、いかなるにかあらん、つねにむつれまほしき心ちする。うつりやすき心ならず、われながら思ひしらるゝを、いとかくにはかにも、人の心はなり行物にこそ。おなじ心にあひ思はゞ、うれしからん」など、なつかしうかたらひ給へば、…。

（上巻 鎌倉時代物語集成50頁）

『すまひ』の右中將が修理亮に対して、『石清水物語』の秋中納言が伊予守にそうしたように「懐かしう語ら」つたのであれば、彼と修理亮とは同性愛関係であったと考えられる。それならば、二人の人物設定は『石清水物語』の秋中納言・伊予守に類似のものであったのかもしれない。『石清水物語』の秋中納言・伊予守は、一方が関白家の子息、もう一方が地方官人であり、おそらくは貴顕の子弟であろう右中將と筑紫に赴任していた修理亮との組み合わせに似ている。更に、両作品には次のような類似点もあると想定できる。

○東国に流された親王の末裔ではあるものの受領階級に属する伊予守を主人公とする『石清水物語』と同様、『すまひ』でも地方官

を経た修理亮という、所謂中流貴族が中心的な役割を担っている。○『石清水物語』の伊予守は東国の戦乱で武勲をたてた武士であり、相撲人らしい『すまひ』の修理亮も、来秋の相撲節への参加を要請されるほど武芸に秀でた人物だと推測される。

また、相撲節を契機に右中將と修理亮との仲が親密になったという点については、相撲節の還饗の際に兄弟の契りを結んだ『うつほ物語』の仲忠・仲澄との類似性を指摘できよう。

ただし、『うつほ物語』の場合、仲忠が仲澄と親交を深めて行ったその真意は、仲澄の同母妹あて宮に近付くことにあった。それは『石清水物語』も同様で、伊予守が密かに恋慕する相手は秋中納言の異母妹木幡姫君であり、中納言に姫君の面影を重ねて、自分の側に居る中納言を姫君と取り替えたいと思う程であるから、秋中納言との同性愛は彼女への叶い難い恋の代償行為に過ぎないと言える。それに対して、都の右中將を恋しがる『すまひ』の修理亮は、右中將を誰かの形代として見ていたのではなく、右中將その人を恋慕していたようである。

四 土佐の修理亮

HとJでは、修理亮が不本意ながらも土佐の室生に住まい、不遇を託つ彼を内記の聖が慰めている（注5）。土佐国での生活が修理亮の意に染まぬことであったのならば、「来し方」「行く先」に対して暗澹たる思いを抱いている感のあるFは、土佐へ赴く途中で読んだ歌なのかもしれない。「室生門」とも呼ばれた「室生」は現在の「室戸」で、土佐の国府所在地からは直線距離にして五〇〜六〇km程離れており、そこに住んでいる修理亮が地方官として土佐に赴任したとは考え難

い。

修理亮が土佐で暮らしていた理由については、「何か無実の罪でも負って、この地の寺に籠っていたいたのであろうか」（小木喬『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』「笠間書院、一九七三年」。なお、本稿に引用した小木氏の説はすべて同書による）、「下向途上の修理亮を襲った賊が、室戸周辺を拠点とする海賊であり、修理亮は室戸に連行され、軟禁状態にあった」（山田和則『散逸物語』「すまひ（相撲）」復元試論―「男色物」なるジャンルからの解放へ向けて―、『名古屋大文学国語国文学』九〇、二〇〇二年七月）などの想定がなされている。

ただし、流罪人は国府の監視下に置かれるはずで、国府から隔たった室戸は配流地として不適當であろうから（注6）、修理亮が室戸に流されていた可能性は、皆無ではないにしても、かなり低いと考えられる。

いずれにせよ、いかなる事情によるのかは不明だが、不本意ながらも土佐に暮らすこととなった修理亮は、都に戻る目処も立たないまま、故郷へ「帰る雁」に「君」への言伝を頼みたいと嘆きながら室戸で春を過ごしていた（H）。Eとの関連から考えると、修理亮が偲んでいる「君」は右中将である可能性が高い。

五 修理亮は土佐守の息子か？

心ならずも土佐で暮らしていた修理亮のその後について小木喬氏は、土佐守女が兄弟の死を悼むGの詞書を根拠に、都に戻ることなく死去したと推測されている。

亡くなった「せうと」というのは主人公（引用者注：「修理亮」）その人以外ではあるまい。兄弟の死んだことをさだかにも聞かなかったというのだから、この女は父と共に土佐にすんでいたのではなく空蟬と同様京におったものと考えられる。ということは、筆者は、主人公がおそらく室戸でなくなったと臆測するからである。

Gの詞書に「雪の降る日よめる」とあるので、土佐守女がこの歌を詠んだ場所は、現在でも北部の山間部以外ではほとんど降雪が観測されない土佐国ではなく、都であろう。小木氏のように土佐守女の「せうと」を修理亮と解釈すれば、修理亮は都に返り咲くことなく土佐で没したと考えられるが、果たして、修理亮は土佐守の息子なのだろうか。

光源氏が須磨に籠もったように、修理亮が任国もしくは都に居辛くなって土佐に籠居したのだとしても、父が国守を務めているという所縁で土佐を選んだのであれば、父と同居、あるいは父の住居近辺に居を構える可能性が高く、修理亮が国府から離れた室戸に居るのは不審である。父に迷惑がかかることを案じて距離を置いたとも言えようが、それなら始めから父の任国は籠居の地に選ばないはずであろう。少なくとも現存資料の範囲では、土佐守女の「せうと」と修理亮とは別人とみる方が妥当と思われる。

やはり、詠者名を登場人物の物語最末における地位で示す『風葉和歌集』で京官である「修理亮」と呼ばれているのだから、『すまひ』の修理亮は最終的には都に戻ったと解するのが適当だろう。

修理亮の姉妹ではないにしても、土佐守女の登場は修理亮の土佐住まいと関連するのかもしれない。光源氏と明石君のように、土佐に籠

居していた修理亮と国守の娘である土佐守女との縁が生じたとも考えられる。その場合、「修理亮の北の方」ではなく「土佐守のむすめ」と呼ばれる彼女は、修理亮の正式な妻にはなっていないが、都へ帰ることになった修理亮と共に上洛した後、土佐国に残った兄弟の死の知らせを聞いて詠んだのがGの歌であろうか。

或いは、土佐国で失意の修理亮を慰めた内記の聖が土佐守女の兄弟に当たる可能性もあり、それならば、兄弟の消息を「日ごろさだかにも聞き侍らざりける」というのも、内記の聖が人里離れた場所で修行していたということで説明がつく。聖と同じ寺に籠もっていた修理亮が上京し、聖の死の詳細を土佐守女に告げたとも想定できようか。

六 むすび

断片的なものではあるが、前節までで提示した『すまひ』の復原案をまとめると次のようなものになる。

筑紫の地方官であった修理亮は、相撲人として参加した相撲節を契機に右中将与親密な仲になる。任国に戻る修理亮は右中將のもとへ暇乞いに訪れ、互いに別れを惜しむ。修理亮が再び相撲人として上京する来秋の再会を期して二人は別れた。筑紫へ下向する途上、修理亮は海辺で右中將を思い出し、恋い慕う。その後、不本意ながらも土佐国室戸に住むこととなった修理亮は、都の右中將を偲んで春を過ごし、自身の不遇を託って内記の聖に慰められていた。最終的に修理亮は都に戻り、京官である「修理亮」に任じられる。

四人の登場人物の中で土佐守女だけは、他者との関係を示す資料が存在しないため、この物語の中で彼女がどのような役割を果たしている

のか不明である。他の登場人物と何らかの関わりを持っていたと想定するならば、修理亮が土佐に流離したことが切っ掛けとなって二人は知り合い、彼女の兄弟の死を修理亮も共に嘆いたのかもしれない。この物語の特徴としては、修理亮という中流貴族が中心的な役割を担っていることが挙げられる。実際に任国へ赴任する地方官を務め、武芸に秀でた相撲人でもある修理亮が、心ならずも住処となった室戸で、遠く離れた都に在る「君」を慕い、この世に生きる甲斐もないような我が身の不運を嘆く。『すまひ』に展開されていたのは、貴頭が流離う『源氏物語』や『伊勢物語』の貴種流離譚とは趣を異にする「流離譚」であったと言えようか。

注

- (1) 『風葉和歌集』の引用は、樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選』「岩波文庫」によった。
- (2) Cの詞書「明けん年も又上るべきよしなど申して」の主語が右中將であるならば、上位者である彼が修理亮に「申す」と記されるのは不審である。『増訂校本風葉和歌集』（中野莊次・藤井隆著、友山文庫、一九七〇年）によると『風葉和歌集』の諸伝本に異同は見られないが、「申して」が「言ひて」の誤りなのか、それとも、「明けん年も又上るべきよしなど（修理亮ガ）申せば」の誤りであろうか。本稿では前者を採用した。
- (3) 『うつほ物語』の引用は『新編日本古典文学全集』により、私に注を施した。
- (4) 中野莊次氏は、『すまひ』を「児物語」と見るべきではあるまいか、と指摘された（『風葉和歌集考（上）』、『国語国文』第三卷二号、一九三三年二月）。

それに対して小木喬氏は、右中将も修理亮も成人男性であるから、この物語に描かれた二人の関係は僧侶と稚児との恋愛関係を描いた「児物語」のそれとは異質のもので、「単に男色あるいは同性愛というべきであろう」との見解を示された。

(5) 小木喬氏は修理亮と内記の聖とがともに過ぎた場所を、室戸にある最御崎寺・金剛頂寺のどちらかであろうと推定されている。本稿では氏の説に加えて、『今昔物語集』巻第十七第六話「ちざうぼさつひのなんにあひてみづからだうをいづること地蔵菩薩値火難自出堂語」において、火災による堂の焼失を防いだ地藏菩薩の靈驗譚が語られる「津寺」と同一とされる「津照寺」しんしょうじを候補の一つとして提示する。「津照寺」の所在地は現在の高知県室戸市室津町で、『今昔物語集』でも「其ノ所ハ海ノ岸ニシテ（新編日本古典文学全集②308頁）」と言われるように海辺に近く、「荒磯を見つ過ぎさば」というJの詠歌状況にも適っている。

(6) 大宰権帥として筑紫に流された藤原伊周を、大貳の藤原有国が「公の御掟よりはさしまして」（新編日本古典文学全集①266頁）世話をしたという記事が『栄花物語』（巻第五 浦々の別）に見える。また、保元の乱に際して父藤原頼長に連座した師長が配流された地でもあり、平清盛が以仁王を流そうとした場所でもある土佐国の幡多は、国府の近辺である。物語に描かれた左遷でも、『夢の通ひ路物語』の岩田中将は、勅勘を蒙って流された播磨で、国守の折々の来訪に慰められている。

(みやざき ゆうこ・本学専門研究員)